剣るぎ ナチスの技術崇拝

新貴族の創出

した。 に向けて、 九三九年九月一 ナチスの食糧・農業大臣は、 つぎのような布告を出す。 H ドイ " 国防 収穫を控えた農民たち 軍 一はポーニ ランドに侵攻

F. イツの農民たちよ!

総統 武器を手にして国を護ることは、 は国民に決然たる出動をするよう命令を下し われわれの名誉

であり権利である。

じように巧みに剣を操ることを、 でもってこの総統の命令に従うだろう。 戦うことのできる農村男子は、 比類なき忠誠と決意 彼らは示すのだ。 農、民 は、 犂と 同、

> わらず汝らの味方でありつづけるだろう。 となって援助したのだが、それと同じように今後も変 豊かに実った作物を汝らが収穫するさい、 の収穫力をそのまま完全に保たねばならぬ。 の責務を負わねばならぬ。汝らの夫、息子、 年老いた者、 かしながら、 男女青年たちよ、 農村に残された汝ら、 藤 原 辰 汝らはい 史 この数年、 とりわけ農 玉 民は 父の農場 まや二重 またもや 一丸

婦、

L

働の成果だ。 は これまで一 イツの主要食料の備えがい ドイツの食糧補給はしかし、 度としてなかった。 まほど蓄えられ これは、 さらにもっ 汝らの労 たこと

汝らがもたらしてくれた成果のおかげでいまの自分が

あることを知っているからだ。

と確保せねばならない。

て、総統の勝利は容易になるのだ。まで与えてくれた以上のものを戦い取ることによっまで与えてくれた以上のものを戦い取ることによっそれゆえ汝らが各々の農場で野に立ち、土壌がこれ

である。

が、ドイツに必要なのだ! これまでよりももっと多くのわれわれの力の投入

ウロット・ヴァルター・ダレー (1)

と戦場との密接な連携のシンボルでもある。総力戦体制のすだけではない。銃後、すなわち郷土戦線 Heimatfront単に前線の兵士の奮闘ぶりを銃後に想像させる役割を果た「剣」とは軍事の象徴であることはいうまでもないだろう。この布告のなかで、「犂」とは農業労働の象徴であり、この布告のなかで、「犂」とは農業労働の象徴であり、

ような意味を持ったのか。これを考察するのが本稿の課題いうことである。この「犂と剣」という表現は、当時どのいうことである。この「犂と剣」という表現は、当時どのなのは、戦争開始という極めて重要な局面において、ダなかでは、農業生産もまた「戦闘」だからだ。だが、問題なかでは、農業生産もまた「戦闘」だからだ。だが、問題

政権をとってからまだ三年あまりしか経過していない、一政権をとってからまだ三年あまりしか経過していない、一めるうえでは邪魔であった。この準備のために実施されたと、そしてなにより彼独特のロマン主義が戦争の準備を進と、そしてなにより彼独特のロマン主義が戦争の準備を進と、そしてなにより彼独特のロマン主義が戦争の準備を進と、ダレーの影響力を四ヵ年計画と呼ぶが、その最高責任が、ダレーの影響力を四ヵ年計画と呼ぶが、その最高責任し、ダレーの影響力を四ヵ年計画から排除した。ナチスがし、ダレーはこのときほとんど政治的影響力を失っていた。

である「犂と剣 Pflug und Schwert」が持った意味は、ダるダレーの「布告」において、ナチスの重要なスローガンそれでも、息子や夫を戦争に送った銃後の農民を鼓舞す

九三六年九月のことである。

うあるべきだ」というイメージがこのフレーズに託され ドイツ騎士団の道を歩ま まれているとみてよい。 ればよか 過去形で書かれてあるが、この過去形にはむしろ 同 よって与えるためには、 牲においてしかなされ得なかった。だとすれば、ドイツの 露 う、 犂に耕地を、 を獲得しようとするならば、それは、 とりわけ重要なのは、 巻=一九二七)で「犂と剣」の対概念を計四回用いてい であった。 らのスローガンとともに、 るとさえ読める。 Volk ohne Raum_ この政策のためには、 ヴェルサイユ条約で失った領土の不当性を訴えるこれ 国が を説く、つぎのフレーズである。「ヨーロッパで土地 ったのだが」という非現実話法のニュアンスが含 あった。 ヒトラーも、 他方、 すなわち、 国民には日々のパンを、 ヒトラー 第四章「ミュンヘン」 と「生命空間 Lebensraum」とい 新しいドイツ帝国はふたたび昔の 『我が闘争』 逆にいえば、 ねばならなかった。 ナチスの膨張政策を支えた文句 ヨーロッパにおいてただ一つの は、 イギリスだ」。 ドイツの過剰人口を養う たい 「将来のドイツはこ (上巻=一九二五、 てい 以上はすべて ドイツの剣に だがもちろ で「親英反 口 シアの 「こうす る。 下 犠

> なる。 ともが、 ち出しているのだ。 ガンを用いているから、 のだ。ダレーはむしろ ギリスやフランスの海外植民地との違いを鮮明にしてい 東方植民は農業植民でなければならなかった。こうしてイ とって未来の「東方植民政策」の象徴であり、 団のバルト海沿岸植民のひそみにならって「犂と剣」を持 と主張する。その大陸支配の象徴として、 植民地ではなく、 ためには、 だが、いずれにせよ「犂と剣」という言葉に、二人 戦争に民衆が積極的に参加する根拠を見てい 帝政期 ヨーロッパ大陸の植民地を獲得すべきだ の南西アフリカに代表されるような海外 つまり、「犂と剣」 「総力戦」 ヒトラーとは若干ニュアンスが異 の象徴としてこの は、 中世ドイツ騎 また、 ヒトラーに スロ その たこ 1

1

0

力の

盛衰とは

無関係

12 重

61

これ

は、

王

地 なき

シンボ でどう生きたかを知るうえでとても貴重な証言だ。 手紙にさえも登場する。この手紙は、 地方の農民兵士によってしたためられた若い農民たち たりした。そればかりではない。 用 ほ 13 かにも、「犂と剣」 ルであることを超えて、 られたり【図1参照】、ナチ党幹 は、農民組合の機関誌 この時代の農民たちの 戦争中にオーバーライン 「犂と剣」 部 0 演 説 0 が タイト VZ 単 登 な 内

VZ

とは否めない

だろう。

きに から 白 は 己 0 わ 維 n 持という最も厳 わ れ農民兵 士から生まれ Monatsfdrift. Deutschen L Bauernschaft V 戦 ger Berband afabemifch-land 12 n deutschen Sochschulen und た新 に身を置 Sr. 1/2 し 12 図Ⅰ

も、戦 石 て、 では は、 剣、 Va え も、 を 0 12. 7 出 な 12. つもピ ŋ ね。 動 ない U 去ることじ 部 vi 移 隊 [……] 永遠に更新され ん カピ、 民とは なん だ。 カに、 だ。 P 新農民に 磨きあず ない 永遠 2 に変わ 0) げ、 なることだ。 戦 かい 争 らない 綺、れ、 われ農民 る が 麗に、 終 保、 わ 種 2 つい 移 た 7 は、 民 0 土. 農民 なく 2 き、 あ 試 か 犂、は 金 0

場と農場をつなぐ絆になっているだけでなく、

世

代

0

あ

61

W

0

手紙は、

おそらく農民兵士が東方植民をする

村

0

農民たちに送ったものだろう。

ここで「犂と剣」

は

戦 若

新 競 b た 争 n を始 K を 獲得 脅 め か す 出 歩 H み 倒 生 的 率 出 勝 0 す 極 利 1 き を博さね 8 て高 E 1 口 11 ば 諸 " なら 民族 18 0 ないる と人 空 間人 で、 増 加 わ

玉

民

社

会主

義的

な農民は、

俗物的

な静

寂

0

後

退

な

h

たちの任務を高尚なものへと格上げするのだ。 は うにも見受けられる。 0 だ 陶 陶酔した手紙」として紹介しているように、 て無駄ではないと信じ切っているようだ。「犂 創 0 醉 出 国民社会主義の農民創出の事業のなかで自分の 絆にもなっている。 へと農民を導き、 という理念のため この手紙を引用 さらに、 そして農民兵士と次世 の戦い だと言 自分の戦 したウヴ 61 聞 61 かせ が、 農民兵 I 代 てい 2 剣 0 新 死 7 るよ が 1: イ 决 民 民 かぶ

ろう。 置 担 戦 争 0 Us 手 もうひとつの主題であるこの 0 た ため、 0 手紙 である 推 か 進力は、 は L ながら、 ひとつの例にすぎないが、 「鱼と土 Blut und Boden」 我が闘争』 これだけでも充分に感じとられ 従来の研究は、 からダレ 「犂と剣」について、 1 VZ ダ V た 0 犂と剣」 1 るま 思 がその 想 でナ 12 るで 重 主 が チ 点 孕 2 ズ を あ な to

n

第 れば、 念なのである。さきほど引用した農民兵士の手紙にお 「血と土」と「犂と剣」 よりも上位においた。 ことで、脈々と連なる良質な と土」のイデオローグと呼ばれた。この主著のなかで、 「犂と剣」もきわめて重要な概念であった。否、 に託した。それゆえ、ダレーを「血と土」の主要なイデオ なかで、「北方人種」の血を残す役割を出生率の えで伝えていく任務を、ダレーは、 れるべきものであった。 レーは われた『血と土の新貴族』(一九三〇)の著者であり、「血 『二〇世紀の神話』(一九三〇)と並んでナチスの聖典 ラーの n ーグと見る従来の通念が形成されたのである。 けれども、 ほど重視し 作『北方人種の生命の源泉としての農民層』(一九二 両者は切り離しがたく結びついている。 その血を有するドイツ農民は 「北方人種」の血の優越を説いていた。ダレーによ が闘争」、アルフレート・ローゼンベルクの ダレーにとっては、 てこなかった。 また、 は ドイツ人の農民が郷土に定着する 一対となってはじめて生きる概 一九二〇年代に少子化が進む 「血」を、 たしかに、 「血と土」だけ 農業収益をあげること 「貴族」として尊敬さ 世襲の ダレ そもそも 1 土 高い農村 は、 むしろ でなく のう 彼の いて とい t ダ 1

うの てしまった」と嘆く。 た」。また別の箇所でも「本来のゲルマンの自 ら下を支配する」。 牧民族は、 いたにもかかわらず、 と剣を同じものとして崇拝し、そこに非常な誇りを持って 主義の基盤は、 「古代の貴族と農民、そして犂と剣の統 ようになってゲルマン農民がかれらに隷 ン人に求めている。しかし、 そしてなによりもドイツ人の直接の祖先である古代ゲルマ であった。そのモデルを、古代ギリシャのスパルタの農民 郷土を守り、それ以外の平時には農業労働をする「貴族」 徴だと述べている。つまり、 九 いて、ダレーは、「犂と剣」こそがドイツ農民の本来の特 は分離してしまった、とダレー と、それを敷衍してまとめた『血と土の新貴族』 は 初期共和政ローマの世襲貴族「パトリキ Patricii」、 のかわりに 遊牧民だけである。 周知の もはや全く意味をなさなくなってしまっ 信仰」 通り原則的に剣と信仰概念を持 他方、 いまや犂と剣は全く別のものに を振りかざす。 中世に教会と領主が力を持つ 剣だけを振りかざし土地を奪 戦争になれば武器を手にして 遊牧民には は歴史を解釈する。 一、このゲルマン 「戦闘的であ 犂 属すると「犂と 由 が 民は、 な る遊 に お

故郷にしっかり

「鈍重な」ドイツ人は、

ダレーの歴史認識に著しい偏見と先入観があることは否め と根づいて土地を耕し、 せるために不可欠であった。 ないにせよ、それは、 はドイツ農民の誇るべき象徴なのだ――。 農民を 自分の土地を外敵から守る。 貴族」と呼ぶことで復権さ それ

値の少ない. 5 げている。ここで、「ホルティは徹頭徹尾正しい。 貴族』では、 ルタの思想を復活」させている、 ティは、 る。『北方人種の生命の泉としての農民層』では、「ホル こっている事件がダレーを触発したのであった。それは 歴史だけではない。 ハンガリーの摂政ホル ダレーの 価値ある人間たちの進歩と増殖を奨励 国家が農業地を封土として与えるという古代スパ 人間たちの増加にブレーキをかける準備を整え 「犂と剣」 と述べ、 ホルティの政策を七ページにわたって取りあ 優生思想の萌芽さえホルティから引き 自分が生きている時代に同時進行で起 ティ・ミクロ の思想に影響を与えたのは、 と評価し、『血と土の新 ーシュの農業政策であ 同時に、 古代の なぜな 価

チスの ホ ティ 運 動と同 様 イエ 口 シア革命以来西進する革命に抗する ル ンの共産主義化に対抗 した初期ナ 出すことを拒まな

U

四ヵ月あまりでソヴィエト共和国は崩壊、 帥ホルティであった。農民の多くはホルティを支持 て、ハンガリー兵を率いてブタペシュトに入城したのが元 況にあった。こうしたなか、 うとしていた。 和国は、 に成立したクン・ベーラ率いるハンガリー・ソヴィエ 「反革命」として位置づけられる。一九一九年三月二一 土地の国有化を宣言し、 さらに、 穀物強制調達もせざるをえな 共産主義化反対派の支持を得 農民から土地を没収 ホルティは 1 一九 状 共

Í 地に を行ったのである。ダレーもホルティのアイディアをすぐ 二〇年三月一日にハンガリー王国の設立を宣言して、 を公布、「農民 Bauer」という称号を法定化する。 就任したダレーは、同年九月三〇日に「帝国世襲農場 に実行に移す。一九三三年六月三〇日に食糧・農業大臣に の座につく。そこでホルティは、農業改革に着手し、 ヘクタールを最大規模とする農業従事者たちで、 「貴族領有地」、農民に「貴族」の称号を与える政策 が 純血で健康であるものを「農民」とし(ユダヤ人 二 五 摂政 法

Landwirt」とすることを法律で定めたのである。 そもそもダレーの課題のうち重要なもののひとつは、

や心身障害者は

「農民」になれない)、それ以外を「営農家

日

としました」。 威信を、そして農民たちの労働に対する誇りを取り戻そう たちに自己意識を、これまでに軽視されてきたこの身分に 自身の半生を振り返ってこう述べている。「わたしは農民 巻く問題の個別性を訴えた。 は、 そが農民を救うという宣伝に終始していた。 たせることであった。 格の低下と負債の増加に苦しむ農民たちに、 九二〇年代末頃からの農業恐慌と世界恐慌のなかで作物価 都市労働者と一端切り離したうえで、「農民」を取 当時、 一九四二年四月、ダレ 共産党は、 労働者との団結こ 他方、 「誇り」を持 ダレー ーは、

葉は、 のと、 あった。 からの気散じを用意する。 民には、先天的に高貴な血が流れているとし、現実の苦境 る。もうひとつは、 両者とも、人間の身体感覚に根ざした古来からの道具であ として位置づけようとする。ひとつは、「犂と剣」である。 効果によって農民を高貴な存在として、 このためにダレーは、 人間の身体に刻まれているものに訴えるダレーの言 しかしながら、 まからみれば甚だしい時代錯誤であり誇大妄想で 「血」である。ドイツの これからみていくように、「犂と ホルティにならいながら、二重 普段、 人間が直接手に触れるも つまり「新貴族 「純血」 の農 0

> らなかったのである。 新貴族」、つまり戦争と農業の統一は単なる妄想では終わ て、 本稿では、ダレ を突き詰めていけば必然的に開けてくるものでもあった。 スの思想の担い手でさえ予想できなかった経路をも通っ 剣を携えた新貴族」の像は、 はっきりと焦点を結ぶことになる。 1 とバッケの農業思想を中心にその道筋を しかし、この道筋は、 ナチスの時代、 「犂と剣を携えた ダレ おそらくナチ 1

神なき時代の 一犂と剣」

追ってみたい。

矛盾なく象徴していた。 れる。聖書では、犂と剣は、 剣は戦争の象徴であった。 う表現にみられるように、ここで犂は平和の象徴であり、 る。「剣を打ち直して犂べらとし」(イザヤ書二・ けのものではない。たとえば、 いうまでもないが 「犂と剣」 剣は犂に、犂は剣に打ちかえら 神の創造した世界それ自体を これは旧約聖書にもみられ というシ ンボルはナチスだ 四) とい

して用いる。 黒地に白い犂と赤い剣を描い 五二四年に勃発したドイツ農民戦争では、 これは、 神の創造した世界を表しているので た 「黒旗」 をシンボ 農民 たちち

は、

り、 ツァーの説教が農民たちを鼓舞させた。農民が武器を持つ びつけられてい > は という正当性を示してくれるのは、 (少なくともルターが農民戦争を「暴虐」だと罵るまでは) ない。 ボルである。 ところが、 マルティン・ルターが説く神への純粋な信仰によって 封建領主と堕落した教会に対する農民の反抗 ダレーの「犂と剣を携えた農民」像に神は無 た。そして、 とはいえ、農民戦争の「犂と剣」もやは そのあとも、 やはり信仰であった。 トマス・ミュン 3/

から生まれたものであった。しかしながら、農民戦争を宗ば「農民戦争」は「犂と剣」が分離したことに対する動揺 教改革の問題としては捉えなかった。 お 用であった。たしかに、 リスト教批 劇として見るにすぎない。こうしたダレーの背景には、 いて農民戦争を肯定的に見ていた。 人間 判があった。 は Щ 0 法則において不平等であることを繰 キリスト教の「人間平等観」を批 ただ、 彼の歴史観からすれ 武装農民の悲 丰

V

ものであった。

V れたあらゆる倫理 だで、 れわれは、 倫理と法という観点から充分に理解されたわ キリスト教への改宗によって引き起こさ 概 念の転換が、 ゲルマン人たちのあ

り返し主

念の玉座に据えた。 (3)ちを持ったものはみな平等であるという文句を倫理 リスト教は けでは決してないことを想像できるであろう。 伝的不平等性のイメージとはまったく正反対に、 「生まれ の偶然性」を説き、 人間 0 人間 顔 か た 0

貴族」という理想像と、 のである。それゆえ、 主義によって、「高潔な血を守る農民」 てしまった」とまとめている。つまり、 教の洗礼を受けさせられて以来、 ダレーはこの数行後で、「彼ら ダレーにとって「犂と剣を携えた新 キリスト教の平等主義は相容れ 全く道義的な根底を失っ [ゲルマン人] は消 キリスト教の博愛 えてしまった がキリスト

ダレ

ーは、

『血と土の新貴

族

だ。 彼は、ニーチェから深い影響を受けており、『北 神」どころか、「精神 Geist」 にさえダレ 1 は否定的 方人

族」 『権力への意志』(一九〇一)からも、ニーチェ 族』では三回、すべて肯定的にニーチェを引用してい 種の生命の泉としての農民層』では一回、 は、 0 み 批判を引用している。「ただ生まれながらの貴族あ 野心満々で鼻持ちならないユダヤ人の隠語である」。 血筋 による貴族あるのみ」。 「精神の 『血と土の 貴族というの 0 「精神貴 新 る 3

れない自立した農民像を抱いているからであろう。 の特徴をしばしば よりも徹底した反宗教的態度である。ダレーが、「新貴族」 対置させながらドイツ精神の根本に据えたローゼンベル 換えたヒトラーや、ゲルマン神話の世界をギリシャ精神に を想定していたからだ。これは、「世界観」を宗教に置き 筋による貴族」として、ダレーは神なき時代の「新貴族 概念は、 ダレーは直接述べていないが、おそらく「新貴族」とい な影響を受けているといえるだろう。 ニーチェの「超人 Übermensch」概念からも大き 「自由」と表現するのも、 人間を超克した 宗教にとらわ m 7 う

貴族」を創出するのだろうか 神は、 「新貴族」を創出してくれない。 では、 何が 新

技術神話 新貴族をつくるもの

義農村通信』)一九三九年九月二二日号に掲載されている けのメディアである『NSラントポスト』 「犂と剣を携えた新貴族」というモデルが、二〇世紀前半 の実社会の文脈に従って読みかえられたからだ。 これを表す最も典型的な写真が、当時の代表的な農村向 ーの思想は、 妄想で終わったわけではない。この = 『国民社会主

【図2参照】。

写体、 であり、 ターの後部に接続される犂である)。このトラクターは大型 いものは が、この文脈で う犂が剣の歩んだ道をたどっている」とある。 は、 キャプションには「かつてのポーランドでは、いまやも 主に戦車と爆撃機によって電撃戦の成功を収めた つまりトラクターである(より正確にいえば、 おそらく開墾に用いられたと推測されるが、 「戦車」であろう。一方で、「犂」は、写真の被 「剣」が表象するものとして最もふさわし ドイツ国防 トラク 部

軍



図 2

学技術」だったのである。農業恐慌で苦しむ農民たちに(ほ) せよ、 身」によって可能となった。というのは、近代戦車がはじ ポーランドという占領地で、しかも、「科学技術」によっ を可能にしたことを、この写真は伝えている。つまり、 L ンド・ 造工程が著しく似ている。また、 していたからである。そればかりでなく、戦時中、ドイツ アメリカのホルト社製キャタピラ・トラクターをモデルと めて戦場に姿を現したのは、一九一六年九月一五日、 イメージではなく、 て実現したのだ。それは、もはや犂と剣という古めかしい の農業機械工場は戦車工場に転用されたように、 ムの会戦だが、これを考案したイギリス人の工兵中佐は、 一誇り」を与えるダレーの「新貴族」創出プログラムは、 犂と剣」の統合を担う「神」の代わりとなったのは か写っていない 軍事技術と農耕技術の機械化が、近代の「犂と剣」 般の扱いに慣れさせる。 ため詳細はわからない。 設計した「フォルクスワーゲン」 トラクターと戦車といういわば ちょうど、 農業機械の普及は運転手 だが、 フェルデ 両者は製 いずれに (=国 ソン イナ 「科

る。この意味で戦車とトラクターは、モータリゼイション農民の身体を戦争へと動員する役割を担っていたのである、という目的があったように、農業機械の普及もまた、まった)、国民が戦時に軍用車を運転できるよう慣れさせ

が生み出した「分身」なのだ。

のが 人に雇われ 多くは、ドイツが強制的にポーランド人農民から奪った土 ○○人、バルカン諸国が六○○○人であった。農民たちの(ધ) 人、ユーゴスラビアが五五万人、ルーマニアが六八万九〇 九四四年~四五年のあいだにとられたデータによれば、 外の在外ドイツ人(=民族ドイツ人)も含まれていた。 そこには、ドイツ国内からの移民ばかりでなく、 は極めて容易に結びつくのである。 移動させるスローガンが 地に移住し、土地を追われた農民たちは、移民したドイツ ガリーが六三万三〇〇〇人、チェコスロバキアが三六二万 のうちポーランドが一二六万人、ソ連が二〇七万人、ハン ンツィヒを含む東部占領地のドイツ人は一〇三九万人、そ 戦車で奪取したポーランドには、ドイツ人が移住する。 「科学技術」 て糊口を凌ぐしかなかった。 であった。 「犂と剣」であり、それを支えた 科学技術のもとでは、犂と剣 これほどの人間を ドイツ国

れになりそのための国民の貯金はすべて軍事費に転用されてし

のナチスによる普及政策に

(結局開戦とともに計

画倒

「神」に代わって「新貴族」 えられてはい もそも ラーのような膨張主義はほとんど影を落としていない。 うことも、全く想定されていない。この書物には、 るということも、 し主張された「新貴族」像には、それが ところが、 『我が闘争』でも、 たが、 「貴族新創出の方法と可能性」 植民地主義の色彩の薄い 10 トラクターと戦車によって担われるとい 具体的な占領方法は 『血と土の新貴族』 ヨーロッパ大陸の植民地化が唱 創出を担うべきものが何であ のなかでくりか 「東欧」で実現 書か 『血と土の新貴 のなか n てなか でには、 ヒト そ 0 え

遺伝的 の遺 ものであり、 いてくれた。というのは、 わがゲルマンの祖先の倫理観へと再び回帰する道を開 分野、すなわち自然科学が、ある一定の条件のもとで 界は、それと関連した身分に関する先入観とともに自 遺伝学が科学的に確立して以来、外見だけで判断し血 伝的価値にもとづいて決められていない身分の境 に是認された人類の不平等のうえに建設される この認識に、 新時代的で進歩しつつある学問 今日の自然科学が回帰した この倫理観というものは、 0

るかがはっきりと書かれてあった。

からである。

君主のフリードリヒ二世のつぎの言葉にまでさかのぼり、 権威づけている。 さらにダレーは、 この 「遺伝学」 の必要性を、 啓蒙専

制

とができるからだ。 t る。というのは、 らゆる努力と手入れを必要とする一種の植物なのであ 値がある。人間とは、 この荒涼とした土地で、パイナップル、バナナやほか が少ないことに怒りを覚える。 つけ、わたしは、その努力を人類に向けようとする者 の熱帯植物を育てようと躍起になっている者をみるに 世界中のどんなパイナップルより人間のほうが この植物は祖国に名誉をもたらすこ 育成しなければならないし 彼らが何と言おうと 価 あ

誇っている。 門家であり、一 でいたからだ。ダレーの師のフレーリッヒは豚の育種の ダレーが一九二〇年代前半に家畜の育種をハレ大学で学ん フリードリヒ二世の言葉にダレ 物飼 の厳格な支持者であった。 育における厳密なメンデル主義学派出身」 九〇〇年に再発見された「メンデル ダレーもまた、 ーが共鳴するのは、 みずからを だと の法 実は

to 働技術にも戦争技術にも通じた「新貴族」 を脅かしていると煽る。 め、 用した育種技術であった。 種 言 まっている、とする。 種との 0 意 [が淘汰されずに残っている」 ことに対しくりかえし憂慮 わ つまり、 ダレーは 人間 を表明する初 ないにしても、「本来自然淘汰されるべき欠陥のある とりわけそのなかの遺伝学であり、「犂と剣を携え の品種改良を行うことは容易ではないとしながら を創出するのは、 「東方人種」による「駆逐交配」が北方人種 ーにとってみれば、 によってその本来の土着性 期 ダレ 東方人種を根絶やしにせよとまでは ダレーにとっての理想である。 1 メンデリズムを人間に当ては から強制収容所までの道 メンデル式遺伝学の知識を応 神の代理を担うの は、 ·貴族 この東方人 性 0 が は

労 弱 な n 純 種 できたということが容易に言えるであろう」。 出すと、とたんに兵士のなかで風邪が流行した。 た。 間火気のない土穴 戒から)塹壕内でストーブを使用しなかったため、 の経験から、恐らくわれわれは、 は快調であった。一九一五年一二月にはじめてストーブを らなかったから---0 なわけではない。 あろうか? の遺伝学と育種技術を、 のにすぎない。 住型農耕民であることを証明したいがために捻り出 屋根をつけた穴のなかで極めて良く中欧の冬を凌ぐことが この「珍説」は、 塹 その生活は終始良いものであったわけではないが、 壕 体験から生まれたように、 科学技術も科学自体も、 しかし、 ちょうどダレ ゲルマン人が移動型遊牧民では のなかで大砲を扱っていたのであ なぜなら当時は塹壕は土穴にほ 以上のような誤謬も含めたダレ 科学技術では 1 氷河時代のあとの その時代の の珍説が 決して政治的 ないと言 第 精神が 次世 12 きれ に中立 なく定 人間 数 るで かな カ月 戦 から

術を生み出すのである。

は、

そう遠くない

ちろん、ダレーの

「科学」が甚だ怪しいことは否め

めての冬の戦争で(ストーブの不足と繋留気球の監視

生々しい従軍

体験を挙げる。「筆者

ダレー

自身、

は時

0

みせる。この証拠として、ダレ

ーは、

第一次世界大戦

可る。 抽象的 は、 代の世界各国における優生保護法の制定にみるように容易 をかかえる貧しい農民たちは、 に超えて世 科学技術は、 はなく、その使用者に向けられる。 たとしても、 に人間に応用された。 リズムも、 業開発を担った。 よって戦車にもトラクターにも移転され、 ゼイショ れ自体の法則に従って絶え間なき発展を遂げる。 る分野に転 集約されるとわたしは考える。 そもそも科学技術 と願うだろう。 植物育種でも動物育種でもない、 資本を養分とし、 な「何もの > 植物、 だそうと試 一界を覆う抽 の技術は、 用でき、場合によっては人間の意志を超えてそ もはやトラクターでも戦車でもなく、 その責任はその科学技術を発明した学者にで 国家資本がつぎ込まれ研究されたメンデ か 動物の枠を超え、 しかし、 の特徴は、 みる。 であり、 その科学技術が人間に暴力を振るっ 象的な技術主義世界のなかで、 自動車工業および鉄鋼業の資本に 場合によっては資本の意図を遙か それ 自分の仕事に その 苦境から脱して「新しい自 どこでも移出でき、 移転、 は、 一九二〇年代~四〇年 その使用者にとって、 「何もの ダレ どちらにもなりうる 転 用、 それぞれ東方農 「誇り」を持ち 0 か」が世界を 自走の三点に 一犂と剣を モータリ あるい あらゆ 負債

> うことでしか、実現できなかった。 もらい、新しい道具と新しい土地(植民地)を与えてもら科学の知識を応用して虚構の「先天的優越性」を設定して携えた新貴族」計画がいみじくも示しているように、自然

こめられていたのである。 Neubildung」と呼んだ。 テージへ「自己形成 Bildung」させるというニュアンスも ダレ ーたちは、 農民たちの植民 ここには、 をし 農民たちを新 ば しば 新 形 V 成 ス

う。 した脈絡からだ。 るバイオダイナミック農業をダレーが支持したのも、 技術」そのも かし、 命科学的ならびに機械的な科学技術主義を見落としてしま 隠れている(おそらくダレーでさえ意識しきれてい にある反都市感情や反資本主義に幻惑されて、その 性質を備えた科学技術であることがわかる。 たが、 義として、そこに科学主義、 これまでの研究は、 ダレーの農本主義的側面はたしかに否定できない。 それはもっぱら「化学」への反発であって、「科学 ダレーにおいても、 のの批判ではなかった。 ルー 10 初期ダレ ルフ・シュタイナーによるバ 問題はあきらかに以上のような 技術主義を見出してこなかっ 1 の一連の著作をロマ 有機農業の源流であ ダレ 1 ない のな なかに こう イオ ン主 生 か

く「技術」(=農法)から抜け出せなかったことであり、Geistwissenschaft」であった。この事例から学ぶことができるのは、科学をオカルト的知によって克服しようとしたシュタイナーでさえ(そしてそれをナチス・ドイツで普及たシュタイナーでさえ(そしてそれをナチス・ドイツで普及たシュタイナーでさえ(そしてそれをナチス・ドイツで普及が出まる。

それほど強力に世界は

「科学技術」という抽象によって司

れていたのだが、

に「科学技術」から抜け出そうとする試みがたくさんなさ

それ自身が体系化することで「科学技

られていたことだ。バイオダイナミック農業では、

たしか

値し ターの普及には一貫して積極的であったし、 方占領、 ずには に基づく先端育種技術を農業政策のアイディアとして用い ない の枠内におおよそ収まってしまった。 しも おられなかった。 生命」 後者 また、 は の断種となって実現した。 ニュ 化学は批判しても、 ル ンベ 前者は戦車とトラクターによる東 ルク法、 あるい 農村に メンデリズム は おけるモ 「生きるに 1

四 バッケの「犂と剣」――おわりに

考えなおす必要があるだろう。ト・バッケの「テクノクラート」的性格も、別の視点からト・バッケの「テクノクラート」的性格も、別の視点から、以上の文脈から、しばしばダレーと対比されるヘルベル

間 Mensch」局を廃止し官僚組織の合理化を試みたことか 農業団体「帝国給養身分団」のうち、農民政策を担う「人 とみなすだけでは不充分なように思える。 バッケの思想を読むかぎり、 ト」としてダレーと対置して論じられてきた。 らもわかるように、バッケは、 であった。ダレーが作り上げたナチス・ドイツ唯一の巨大 ベルト・バッケは、ダレーのあとを継いだ食糧・農業大臣 た在外ドイツ人(スターリンと同郷のグルジア出身)、 口 シア・コーカサス地方の黒海沿岸のバツーミで生 単に彼を「テクノクラート」 しばしば「テク しかし、 ノクラー まれ

開 説 ツ労働者党の世 かれたとき、 たとえば、 バッケは、 タイトルこそ「犂と剣」 一九四四年二月一二日、「国 東方植民の煽動を企てている。 バッケが行った演説である。 【界観の祭典」という催し物がダンツィヒで にほかならなかった。 民社会主 そのとき そのさい、 義 ドイ

ドイツは、詩人と哲人の国であるばかりではない。兵するのだが、その一方で、バッケは「歴史」を重視する。「人種学」を「国民社会主義的世界観の核心」として称揚

は、 to このような兵士的な態度は、ゲルマン・農民的 不可欠な生命空間を勝ち得ようとする態度のことだ。 に、その民族至上主義的な課題を教育するために必要 的野心とも無縁である。 的な態度というのは、 士らしい態度が刻印された国でもあるのだ。この兵士 民族と故郷を守ろうとし、 単純に武器を扱う喜びとも、あるいは帝国 しかしながら、 真に兵士的な態度とい 発展しつつある民族 海賊的行為と の侵略 な歴史 うの

では、自分の土地の世話をし、それを耕したが、それ民は、自分の土地の世話をし、それを耕したが、それ民は、自分の土地の世話をし、それを耕したが、それ民は、自分の土地の世話をし、それを耕したが、それ民は、自分の土地の世話をし、それを耕したが、それの厳しい労働のなかで自然淘汰の法則を知るに(33)

である。

剣のみでは一度として民族の本質に応じた統治を打ちの東方植民の例を挙げたあと、つぎのように述べている。「犂と剣」に関しては、「農民戦争」や「ドイツ騎士団」

立てることができなかったし、剣のみでは一度として立てることができなかったし、犂、すなわち農民の労働があってはじめて、民族の存立を確固としたものにできなかった。そうで民族の存立を確固としたものにできなかったは一度として

「科学技術神話」がふたりのあいだの橋渡しをしていたのらだ。しかしながら、その断絶を超えてあまりある強力ない洗礼を受けたダレーは科学技術主義に頼らなくては、ムの洗礼を受けたダレーは科学技術主義に頼らなくては、ムの洗礼を受けたダレーは科学技術主義に頼らなくては、人間がある。バッケは、この農法の普及に激しく反対したからだ。しかしながら、その断絶を超えてあまりある強力ならだ。しかしながら、その断絶を超えてあまりある強力ならだ。しかしながら、その断絶を超えてあまりある強力なの洗礼を受けたダレーは科学技術主義に頼らなくては、ムの洗礼を受けたダレーは科学技術神話」がふたりのあいだの橋渡しをしていたのうだ。しかしながら、その断絶を超えてあまりましていたのです。

た。第一次世界大戦の塹壕の記憶と農民たちの身体性に直とおりである。それもただの科学技術至上主義ではなかっ義の深い根が張り巡らされていることはすでに論じてきたふれた人物とみなされてきたダレーにさえも、科学技術主 従来ナチスの幹部のなかでもっともロマンチシズムにあ

に解き放ったのである。 に解き放ったのである。

である。ただ、その健康さの極地であったにすぎない。より、むしろわたしたちが生きる「健康な近代」そのものフ・ポイカートのいうような「近代の病理と歪み」というこのかぎりにおいて、ナチズムとその残虐は、デートレ

- (1) Richard Walther Darré, Deutsches Landvolk!, in: Nationalsozialistische Landpost, 8. September. 1939. 傍点は引用者。
- (\infty) Adolf Hitler, *Mein Kampf Bd.2*, Zentralverlag der NSDAP, München, 1927, S.154.
- (四) Pflug und Schwert :Monatsschrift der Deutschen Bauernschaft, Nr.1/2, 1934, 表紙。
- (4) Hermann Riegerdt, Oberheinisches Land in der

bäuerlichen Raumordnung, in: Die junge Dorfgemeinschaft, Bd.4, 1941, Heft 5, S.4. (Uwe Mai, *Rasse und Raum» :Agrarpolitik, Sozial- und Raumplanung im NS-Staat, Ferdinand Schöningh, Paderborn, 2002, S. 202. から引用)。傍点は引用者。

- (5) たとえば、Gustavo Corni / Horst Gies, *Blut und Boden :Rassenideologie und Agrarpolitik im Staat Hitlers*, Schulz-Kirchner Verlag, Idstein, 1944, S.41 では、「生命空間 Lebensraum」の説明するくだりで、あは、「生命空間 Lebensraum」の説明するくだりで、あるナチスの農政家の「剣と鋤先による征服」という言葉を引用しているが、これ自体について展開していない。
- (©) R.W.Darré, Neuadel aus Blut und Boden, J.F.Lehmann Verlag, München, 1930, S.35.
- (7) Ibid., S.36.
- (∞) Ibid., S.34.
- (Φ) Darré, Das Bauerntum als Lebensquell der Nordischen Rasse, J.F.Lehmann Verlag, München, 1929, S.
- (2) Darré, Neuadel, S.52
- (II) Edwin Erich Dwinger, Die 12 Gesprüche 1933-1945, blick+bild Verlag, Velbert und Kettwig, 1966, S.52.
- (2) Darré, Neuadel, S.36
- (3) *Ibid.*, S.19
- (4) Ibid., S.14.

15

本稿では、仮に、「技術」を、「知識・知恵を応用して

自然および人工の事物を改変し、人間生活に役立てるわ自然および人工の事物を改変し、人間生活に役立てるわら、農業の場合、機械化の意味は含まれても、化学のおが、農業の場合、機械化の意味は含まれても、化学のるが、農業の場合、機械化の意味は含まれても、化学のるが、農業の場合、機械化の意味は含まれても、化学のに用は含まれない場合が多い。本稿では、化学の知識に用は含まれない場合が多い。本稿では、化学の知識に用は含まれない場合が多い。本稿では、化学の知識に用は含まれない場合が多い。本稿では、化学の知識に関する知)も、「科学技術」に含めている。

- (4) Christian Zentner / Friedemann Bedürftig(Hg.), Das grosse Lexikon des dritten Reichs, Südwest Verlag, München, 1985, S.603.
- (17) Darré, Neuadel, S.72-73. 傍点は著者。
- (2) Ibid., S.127
- (\(\mathbb{P}\)) Darré, Bauerntum, S.15.
- (2) *Ibid.*, S.228.
- 生」が生んだ「民族の絶滅」』(柏書房、二〇〇五)。(1) 拙著『ナチス・ドイツの有機農業――「自然との共
- (2) Vgl. Corni / Gies, Blut und Boden, S.24
-) Reichsamt für das Landvolk(Hg.), Pflug und Schwert :Rede des Oberbefehlsleiters Reichsminister Backe auf der weltanschaunlichen Feierstunde der NSDAP am 12. Februar 1944, Reichsnährstandsverlag, Berlin, 1944, S.4.

(4) Ibid., S.5.

25

- 一九九七)、二〇頁。の社会史 [新装版]』(木村靖二/山本秀行訳、三元社、の社会史 [新装版]』(木村靖二/山本秀行訳、三元社、デートレフ・ポイカート『ナチス・ドイツ ある近代
- (ふじはら・たつし 京都大学人文科学研究所助手)